

チャンス・チャレンジ・チェンジ

秋田県立支援学校天王みどり学園 加賀谷 勝

体罰の6つの問題



北海道で男児が両親から「しつけ」として置き去りにされた事件について、米カリフォルニア大学の元主任研究所員森田ゆりさんのコメントを紹介します。～秋田さきがけ新報より～

1 「体罰は大人の感情のはけ口」

- ・最初はしつけと信じていても、自分の怒りの感情に圧倒され、理性的に行動できなくなります。そんなときは「自分は怒っている」と、正直に認めることが必要です。

2 体罰は恐怖を与えることで子どもをコントロールする方法

- ・体罰を使うと、子どもは怖い人の言うことは聞かぬが、怖くない人の言うことを聞かなくなり、やっではいけないことを陰でやり、うそをつくようになります。

3 体罰が即効性があるので、他のしつけの方法が分からなくなる

- ・体罰以外の方法は、時間がかかることが多いのですが、「いのち」を育てるとは待つことでもあります。

4 体罰はエスカレートする

- ・体罰は激しさを増し、大人が自分の感情の増幅を抑えられなくなるから危険なのです。

5 体罰は見ている周囲の子どもにも深い心理的ダメージを与える

- ・この事件の男児には兄弟がいますので、親は兄弟にも謝り、揺らいだ親子の絆を回復する必要があります。

6 体罰は取り返しのつかない事件を引き起こす

- ・今回のケースは最悪の結果ではなく、取り返せることが幸いでした。

親から受けた体罰は、他の大人よりもはるかにダメージを与えます。家族関係を回復させるには、家族一人一人が安心できる場で、気持ちを表現し合うことが大切です。

高等学校の特別支援教育の現状



【中学校から申し送りのあった生徒が適応している理由】

- 1 中学校から家庭問題、不登校、発達障害に関する情報提供がされるようになったり、保護者が相談したりするケースが増えたことで支援体制づくりが進めやすくなった。
- 2 周囲が多様性を認め合い、気になる生徒とうまく付き合うことができるようになる。
- 3 実業高校では、対人スキルが少し苦手でも、好きな実習を通して自己肯定感を高め、就労を目標に頑張れる。
- 4 入学を機に本人が「変わりたい」という気持ちが強く、自己理解が促進される。小さい頃の自分を知っている人がいない遠くの高校を選択した、中学校のときと同じ行動をしていると高校では自宅謹慎等のペナルティがあるので変わった、中学校で不登校だった生徒が高校で登校できるケースも多い。

【特別支援教育推進の課題】

- 1 特別支援教育の考え方に、管理職を含め校内の先生方に温度差がある。
- 2 学年ごとに動くことが多いため、組織的に対応できない。
- 3 支援を必要とする生徒の背景が複雑化している。(家庭問題、二次障害、不登校、精神疾患等)
- 4 本人や保護者が支援を望まないケースがあり、合意形成が難しい。(自己理解・生徒理解)